

事業名	第37回無人島に挑む全国青年の集い
実施期	平成22年8月15日(土) ~ 21日(日)
担当者	企画指導専門職 仲地 雄太



## I 事業の趣旨

無人島には豊かな自然、厳しい生活環境が存在する。その中で全国各地から集まった新たな仲間たちと長期の体験活動や集団生活を通して、お互いが助け合いや学び合い、そして自己を見つめなおすことで参加する青年たちの社会参加の意欲を高め自立を促すきっかけとする。

## II 事業の概要

### 1 事業の目的

青少年の課題を踏まえ青年期の若者に対象を絞り、「無人島における長期の自然体験や集団生活を通して、青年の意欲を高め、自立を促すこと」を目的に事業を企画する。「仲間とともに三不知を克服し、乗り越えろ！」をコンセプトに掲げ、参加した青年達が班を中心に協力・協同しあいながら「三不」を乗り越え、その過程の中で自立を促し次代を担うリーダーとしての資質を高めていく。

### 2 参加対象及び募集人員

高校生～おおむね30歳  
おおむね30名程度

### 3 参加状況

男性7名、女性5名 計12名

高校生(県内)・・・1人

大学生(県内)・・・1人

大学生(県外)・・・8人

関東・・・7人

関西・・・1人

社会人(県内)・・・2人

### 4 実施上の留意事項

無人島での活動ということから、安全面への配慮を重点的に行った。事前踏査での安全確認、緊急避難道の開拓(船が出せないときの対応)、24時間体制での急患搬送体制の確立、日々の健康チェックの実施、海上に出るときの安全監視体制(水上バイク、船舶)等行った。

また、過去の実施状況を見ても悪天候等で全日

程完全実施は少なかったため、代替プログラムを検討しておく必要がある。基本的に無人島内ならばカウンセラーを中心に班ごとの創意工夫で行うが、無人島への移動ができないときなどは渡嘉敷島内での活動になるので、担当者中心に荒天時プログラムの準備が必要になる。

### 5 活動のようす

**1日目** 無人島での生活の基礎スキルの習得を行う。



《スノーケリングの基礎》



《火おこし》



《ロープワーク》



《採取した貝の料理》



《パパイヤ（食材）の確保》



《おなかすいたー》

**3～4日目** 班別活動でカウンセラーの指導のもと活動し各班の絆を深めていく。



《魚とったどー》

**5日目** シーカヤックで渡嘉敷島を一周するなかで参加者全体の一体感と参加者それぞれの困難を乗り越える力をつける。また、夜にはソロビバークでこれまでの自分と、これからの自分について考える時間を過ごす。



《カヤックで渡嘉敷島一周へ》

**6日目** 参加者全体での追い込み漁体験、感謝祭をとおしてそれぞれの班の体験を「わかちあう」ことでその成果を確認する。



《追い込み漁 打合せ》



《追い込み漁 大漁です》



《感謝祭 ディナーを前に》



《わかちあいのつどい》

**7日目** 参加者全員で撤収作業、片付け、閉講式を行う中で事業の総括を行う。

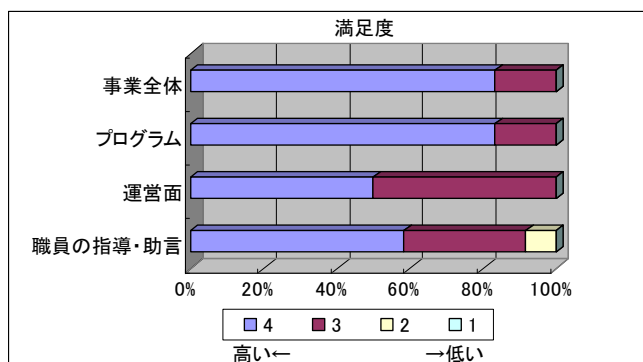


《別れのあいさつ》



《最後にみんなで思い出の一枚》

## 6 アンケート結果



### 《良かった点》

- 貴重な体験が多くできました。今までにない経験を多くでき新鮮だった。魚釣り、貝採り、クラフト、追い込み漁などを体験できてとても充実した時間を過ごせた。
- 他では絶対できない貴重な体験、普段は出会うことのない人達との交流ができた。
- カヤックや追い込み漁など普通ではできない体験やオーバーナイトソロのような人の大切さや自分の人生を振り返るような時間もありとても満足。空いた時間もクラフト作り等で暇にならずに過ごすことができ1日1日がとても充実していた。ボランティアの皆さんも楽しい遊びを提供してくれてとても感謝している。
- カウンセラーの方が全てをやるのではなく自分たちで考えられるというチャンスを与えてくれた。専門的知識を単に教えるだけでなく考えさせるところが良かった。
- 安全対策が海上でとてもしっかりしているので泳ぎが不得意な参加者も安心して海洋時活動を行う上で重要と思うのでよかったと思う。
- とても素敵な苦しくも楽しく学ぶことの多かった7日間だった。参加者の皆様やスタッフの先生方、全ての人にたくさんの優しさを与えていただけてとても感謝している。
- 7日間の間で自分の中で色々なことを考えさせられた。これから日常生活に戻ってからも、今回の体験からの気づきを発見していくと思う。活かしていきます。ありがとうございました。

### 《改善すべき点》

- プログラム自体は楽しかったが、シーカヤックは格別に辛かった・・・達成感よりつらさにやや傾いた。
- ほぼ常に大人が近くにいる自分たちの失敗体験が少なかった。
- 魚などを潜って探すときもスタッフの方がたくさん採ってくれるので、大変さはわかって食材がないことの大変さが体験できなかった。もう少し手を抜いて少ないぐらいでいいように思う
- 無人島生活をする上で、カウンセラーの方が時間を教えてくれたりすることがあったが時間は

まったく教えないほうがいいと思う。

## Ⅲ 成果と課題

### 1 事業の成果

本企画は無人島でのサバイバル体験を通して参加者同士が協力・協働を行うことにより、仲間の大切さ、自分の在り方を再認識することを目指し企画した。青年たちはその後の生活の中で社会参加の意欲を高め自立を促すことが求められるがその力を無人島生活の中で鍛えることができた。

特にカウンセラーを中心として各班は無人島での不便・不足の中から如何にして乗り越えるかを考え、食料を調達し、火をおこし、調理をしていく。寝る場所も雨風をしのぐために相談しあいながらブルーシートを工夫して寝床を作るなどまさに「生きる力」を培うことができた。

また、生活していくには一人ではなく、仲間の大切さそしてコミュニケーションの大切さを実感する機会となっていた。

プログラムの中にはオーバーナイトソロ活動があり、今後の自分を振り返る時間を設けている。参加者は非日常のなかで将来（3年後）の自分への手紙を記し、それぞれが改めて自分の生き方に決意することができたと思う。

### 2 今後の課題

本事業は37回を迎え、これまで県内外において先導的役割を果たしてきた。今後は内容をより充実したものとするために、研究を深め内容の充実に努めていかなければならない。

また、昨今自然体験活動における事故が全国的に見られるが、絶対に事故を起こさないためにも毎回、計画段階から綿密な計画、確認が求められる。常に油断・慢心・マンネリ化の防止の徹底を図る必要がある。

## Ⅳ おわりに

今回の事業は天候に恵まれ全日程計画通りのプログラムを展開することができた。快晴だけではなく、適度の雨があり、自然のシャワーを浴び水(雨)のありがたさを感じることができると、担当としてとてもうれしい7日間であった。参加者を見ていても日にちを重ねるごとに反省の言葉などからも「班の中でのコミュニケーションなどが良くなってきた。」「お互いの助け合い(思いやり)がでてきた。」などの言葉が聞かれ次第に班としてのまとまりが出てきた事はこの事業の趣旨の達成ができたと感じた。

この自然体験活動が成功できたのもカウンセラーの方々、サポートの方々、そして参加してくれた全国の青年たちの協力があったのものだと思う。今回の体験を生かし社会の一員として、次代を担うリーダーとして羽ばたくことを期待する。